

令和4年度 学校評価

■ そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない
 ■ そう思わない
 ■ わからない

①いのちを大切にす心の教育の充実といじめや不登校への細やかな対応

1 一人一人の児童生徒の尊重	2 道徳・心の教育の充実
学校は、一人一人の子どもを大切にす指導や対応ができていますか。	学校は、豊かな人間性を育む心の充実に努めていると思えますか。(礼儀、生命尊重、思いやりなど)
<p>保護者 児童 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>	<p>保護者 児童 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>
<p>【考察】どちらの項目も保護者の4評価は昨年度とほぼ同じで、3評価と合わせた肯定的評価は、昨年度より数ポイント下がったものの、どちらも85%と高い評価をいただいている。また、教職員の評価はどちらも肯定的評価が100%と昨年度と同じであるが、1「一人一人の児童の尊重」の項目では4評価が5ポイントアップし、同項目の児童の4評価も昨年度に比べ6ポイントアップし6割を超えた。学校では、まず、担任が学級の児童一人一人にしっかりと寄り添い、話や悩みをじっくりと聴いて対応するとともに、児童理解夕会で気になる児童の情報を共有し、全職員で見守り・声かけ等の支援を行うよう努めている。そういう教職員全体の意識が子どもたちへも伝わり、保護者へも伝わっていると考えられる。一方で両項目とも、昨年度とほぼ同じく児童及び保護者から5～9%の否定的な評価を受けているという結果を真摯に受け止め、一人一人を大切にす指導や家庭と連携しての親子道徳の日、道徳教育の充実等に努めていく必要がある。</p>	

②確かな学力の向上と社会の変化に対応した教育の推進

3 授業力向上	4 タブレット端末活用
先生方は、わかる授業、楽しい授業づくりに努めていると思えますか。	子どもは、タブレット端末を活用して学習していると思えますか。
<p>保護者 児童 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>	<p>保護者 児童 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>
<p>【考察】2つの項目の肯定的評価の割合に目を向けると、3「授業力向上」で児童の評価が昨年度より3ポイント下がり84%となっているが、他はほぼ9割という高評価となっている。校内研修等で、タブレットの効果的な活用をはじめ、児童の意欲を引き出すような教材や課題提示の工夫、めあての明確化や個別の支援及びみんなが分かる授業展開の工夫等について研修を深めており、本校教職員が目指す全員参加の授業づくりの工夫が保護者や児童に伝わっているものと考えられる。一方、両項目で、保護者や児童から6～12%の否定的評価をもらっているし、4の評価項目は2年目であるが、昨年度はなかった教職員の否定的評価も4%見られた。どういふ点でまだ足りないのかという保護者や児童の声に耳を傾け、同時に、否定的な評価を行った教職員からも判断根拠を聞き、改善に向けて全職員一丸となって取り組んでいきたい。</p>	

③教員が子どもと向き合うための体制の整備

5 学校の支援体制	6 共生社会を担う人材の育成
学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思えますか。	学校が行っている「交流及び共同学習」等は、相互理解につながっていると思えますか。
<p>保護者 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>	<p>保護者 児童 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p>
<p>【考察】両項目の肯定的評価を昨年度と比較してみると、児童は84%でほぼ変わらない。保護者は、5「支援体制」で72%、6「共生社会」で71%と、それぞれ昨年度より約20ポイント下がっているが、4評価だけを見るとほぼ変わっていない。これは、今年度から評価方法をフォームスによるデータ回答とし「分からない」という選択肢も加えたことにより、昨年度まで3評価「どちらかといえばできています」と回答していた方々が「分からない」を選択したものと考えられ、評価傾向としては大きな変化はないと思われる。(昨年度まではプリントで評価が分からない場合は無答で提出)また、教職員では、両項目で4評価がそれぞれ10ポイント・6ポイントアップしている。特別な支援を必要とする児童について、個別の指導計画のもと、本人や保護者とともに対応を考え、実践している効果が表れてきている。6「共生社会を担う人材の育成」に関しては、実際に学校で体験している児童の4評価は50%と高いので、今後は、通信や懇談会等を通して、交流や共同学習等の良さを保護者にしっかりと伝わるようにより積極的に発信していく必要がある。</p>	

④ 学習に集中できる教育環境づくりと安全対策の推進

7 安全と事故防止	8 家庭や地域との連携協力
学校は、子どもの事故防止などの安全教育に取り組んでいると思いますか。	学校は、家庭や地域と連携・協力しながら教育活動を進めていると思いますか。

【考察】7「安全と事故防止」では、教職員の4評価が昨年度より14%も増え、61%となり、否定的な評価がなくなった。また、児童は「あなたには、事故にあわないようにするなど、安全に気をつけて生活していますか」という問いに対して、肯定的な評価が93%と高く、昨年度に比しても2ポイント増えている。長引くコロナ禍の中、交通安全は勿論のこと、新型コロナ等の感染症防止の取組(三密回避、こまめな手洗い・うがいの励行、換気、必要に応じたマスクの着脱等)や地震・火災等の避難訓練、けが、不審者事案の発生等、機会をとらえて自分の命を守る行動や安全教育に力を入れてきた効果が表れていると思う。一方、保護者の評価では、肯定的評価が昨年度よりも15ポイント下がりに80%となった。「分からない」という回答が11%あったので、他の項目と同じく、学校が力を入れて取り組んでいることをしっかりと理解していただけるように、様々な機会や場を通して積極的に伝えていく必要がある。

8「家庭や地域との連携協力」では、教職員が、昨年度より4評価を4ポイント伸ばし肯定的評価が96%となったものの、昨年度はなかった2評価が4%見られた。保護者では、肯定的評価が昨年度より10%下がりに78%となったものの、否定的評価は15%とさほど変わらず、「分からない」という回答が7%であった。5・6項目での考察と同じく、これまで3評価と判断してこられた方々の中で今回「分からない」という回答をされた方が一定人数おられたためと考えられる。

コロナ禍の生活も丸3年となり、教職員としては電話や通信での連絡に加え、ホームページ、安心メール、タブレットを活用してのオンライン等、工夫しながら連携・協力を努めているという意識をもっている者がほとんどだが、やはりコロナ禍以前と比べれば、家庭や地域と連携しての教育活動は自粛せざるを得ないものが多く、保護者の中にはもの足りなく感じる方々がおられるのだと考える。

5月には新型コロナも5類扱いとなる予定で、学校を含め地域・社会全体が、コロナ前の生活に戻っていくことが予想される。来年度は、コロナ禍の生活の中で培った様々なノウハウを生かしながら、家庭や地域との「新たな連携」に取り組んでいきたい。

本校教育の重点目標 (学校独自の項目)

9 気持ちのよい挨拶と返事	10 考えや思いを相手に伝えようとする態度
子どもたちは、気持ちのよい挨拶と返事ができていると思いますか。	子どもたちは、自分の考えや思いを相手に伝えるように話していると思いますか。

【考察】9「気持ちのよい挨拶と返事」と10「考えや思いを相手に伝えようとする態度」の2項目は、昨年度から新しく学校の重点目標として掲げたものである。昨年度と比較してみると、10の児童の4評価「できている」が11ポイント下がってはいるものの、保護者や児童の「できている」どちらかといえばできている」という肯定的な評価は、どちらも約8割で傾向としては昨年度と大きく変わってはいない。一方、教職員は大きな変化が見られ、両項目において4評価「できている」がなくなり、9「挨拶と返事」では、「どちらかといえばできていない」という否定的な評価が15ポイント増え、肯定的な評価と同じ割合となった。また、「できている」という4評価は、どちらも児童が最も高く約4割、保護者はその半分の約2割にとどまっている。児童が「できている」と判断するレベルと保護者や教職員がそのように判断する姿に差があることが一因ではないかと考える。保護者や教職員が期待する望ましい姿(挨拶・返事・考えや思いの伝え方)を具体的に子どもたちへ伝え、目指す姿を共有しながら、家庭としっかり連携して取り組んでいく必要がある。特に「気持ちの良い挨拶」については、児童会(生活・安全委員会)とタイアップして、児童の主体的な行動を認め、一人一人の意識の向上と望ましい生活習慣の定着に努めていきたい。

来年度の具体的な取組について

- 日常の行動観察・会話や「心のアンケート」「きずなアンケート」等の活用により児童一人一人の思いを受け止め、問題の早期発見・迅速な対応に努めるとともに、スクールカウンセラーや心のサポート相談員、スクールソーシャルワーカー、区役所保健子ども課、児童相談所など、関係諸機関の協力も得て、校内での教育相談体制を充実させ、全ての子どもが安心して楽しく過ごせる学校づくりを進める。
- 各学級での係活動や、児童会活動・クラブ活動での縦割り集団での活動などで、形態や活動内容を工夫し、多様な活動を充実させることで、一人一人の活躍の場をつくり、自己肯定感を高め、互いに認め合う集団づくりを進める。
- 職員研修や放課後のミニ自主研修により、電子黒板・実物投影機・タブレットなどICT機器の効果的な活用法について研修を深めるとともに、子どもたちの意欲を引き出すような教材や課題提示の工夫、わかる授業展開の工夫、デジタルとアナログの効果的組合せなどについて研修を重ね、児童が「わかる」「できる」喜びを主体的に味わえる授業を目指す。
- 新型コロナの扱い変更により、学校を含め地域・社会全体がコロナ前の生活に戻っていくことが予想される中で、コロナ禍の生活で培った様々なノウハウを生かしながら、家庭や地域との「新たな連携」に取り組んでいく。

学校関係者評価

- ・低学年（特に1年生）の挨拶が気持ちよく、元気をもらっている。横断歩道の渡り方も立派で、教育（学校の指導）が徹底されていることを感じる。一方で、高学年児童は、自分から挨拶をする子が少なく、こちらから挨拶をしても挨拶が返ってこないこともある。立ち止まって挨拶できる子はとても少なくなった。学校・保護者・地域が一体となって連携・協力しながら、子どもたちにさわやかな挨拶の習慣が定着するように取り組んでいきたい。
- ・時折、子どもたちと接する際に、気持ちの良い挨拶や学校での出来事を話してくれる様子から、学校での取組（日々の教育活動）の良さを感じ取れている。地域との連携をより強め、皆で見守る環境となるよう支援と応援を続けたい。
- ・学校に対する地域の支援体制が以前と比べ弱くなっている。地域の見守り隊の活動も今はなくなった。青少協では行事の精選を行い、本当に必要なものに予算を組んでやっていきたいと考えている。地域公民館では、コミセンを会場として人形劇（校区内に劇団「パレット」の事務所あり）の公演を行いたいと考え、現在、コミセンで月に1回行っている地域食堂「陽だまり」とコラボして実施できないか検討している。学校で何か地域に対しての要望があれば、いつでも連絡をしてほしい。
- ・5年生の集団宿泊教室や6年生の修学旅行のとき、安心メールで状況報告があったのがとても良かった。家庭や学校を離れた場所で何をしているか分からない中、活動状況や食事のメニュー等がこまめに配信されていてとても安心できた。
- ・私自身（親）も心に余裕がなくなると、子どもに対しても余裕のない接し方になってしまう。先生方も日々の残業や休日勤務が減るように、工夫しながら働き方改革を進めてほしい。